

学校教育課だより

# かけはし

## 御殿場市のへ教育ワールドに浸る

—教育は「信頼」のうえに成り立つ—

教育長 勝又 将雄

夏休みの最後に近い日。各中学校代表の中学生による「子ども環境会議」の市長・議長への提言書と意見交換を聞き、中学二年生の考え、行動に改めて「未来の担い手」を再確認しました。中学生諸君には、学校のいろんな場で発信、活動してほしいと伝えました。学校、園の「前期後半のしめくり」、そして「後期活動の展望」をこの時期に冷静に、丁寧にしてほしいと思います。

さて、夏の「市教育フォーラム」は、今回も校長会、教

頭会の協力を得ての実施となりました。全体会、分科会を含めて皆さんの協力あつての「フォーラム」です。終日参加された清水町の山下教育長さんからは、「さすが、御殿場らしい教育の姿に感服した」という感想と「自分たちの町でも何とかな様の研修会を立ち上げたいと考えている」という話を聞かせてもらいました。

縁があつて、当地区に赴任されている教職員の皆さんには、教師生涯を展望したとききつと大きな財産となつてい



学校教育課だより  
「かけはし」  
【第5号】  
教育フォーラム特別号  
平成 27 年 9 月 1 日発行  
御殿場市教育委員会



ることに気付くでしょう。教育行政も、現場の先輩の先生方も、「育てること」に「手間暇」かけることを厭いません。なぜなら、「人を育てつつ、自分も育つ」ことを体験的に分かっているからです。素晴らしい北駿の教育世界に連なる教育現場に立っていることに誇りを持つと同時に、子どもたちの健やかなる成長にどういう貢献ができるのかさらに真摯に考えるべきです。人を育てるのは「人」です。やはり、明るく元気な先生方がいて、学校は明るく元気な地域にも笑顔が届けられるのではないでしようか。

「市の教育ワールド」の一環とも称される今年度のフォーラムの「基調講演」です。昨年度は、たつての願いで野口克海先生に依頼しました。今年はその野口先生に縁のある



やはり大阪で活躍された原田隆史先生をお呼びしました。野口先生同様に、原田先生の熱心さ、前向きさ、柔軟さは、きつと感動と、教師としての初心を思い起こさせられたのではないでしようか。一人一人の心に刻まれた言葉を大切に育ててほしいと願います。

午後の分科会は昨年以上に工夫が凝らされていきました。「学校安全部会」では、石巻市の橋本校長先生のお話に圧倒されましたが、先生の朴訥したお話と報告される写真映像には目を見張りました。最後の「校歌らしくない校歌」はすべて聞きたいくらいでした。貴重な時間を共有できました。いろんな縁で遠方まで足を運んでくださった先生に感謝しています。

最後に、遺憾ながら、この夏休み中に市内教職員の〈不祥事〉が発生してしまいました。生徒、保護者、地域、そして市民の皆様にご迷惑とご心配をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。教育界の不祥事につきましても目の前に子どもたちがいるだけに、教育の「信頼・信用」の失墜を切なく思います。臨時校長会の開催、当該校では臨時保護者会開催などの対応をし、事件対処と同時に信頼回復に全力で取り組んでいます。信頼はあつという間に瓦解し、回復には多くの時間を費やします。不祥事は子どもたちの人生に傷をつけることの切なく悲しい重みを忘れてはならないと思います。

**教育フォーラムを  
振り返って**

今年度の教育フォーラムを振り返り、参加者の皆様、講師の皆様、実行委員の方々、多くの関係者のご協力により研修会が実施できたことに感謝し、事務局としてお礼を述べたいと思います。

「基調講話、市長さんのあいさつ、原田先生のお話、子どもにとって大切なことを考えさせられました。家庭・学校・社会へと、子どもたちの育ちの場面が、一つ一つがつながっていくために、教師は子どもと向き合い、取り組めることとは何か」と、今を振り返りながら、お話を聴きました。

「何かにつまずいたら、まず自分を見つめ直し、前へ進んでいけるようにしたいと思います」と、アンケートに言葉を寄せていただいたように、このフォーラムでの研修が毎日、子どもたちと一緒に頑張っておられる先生方に、一つでも多く力添えになるといいと思います。

講師の先生方には大変お忙しい中、時間の都合をつけていただきました。原田先生は前日夜遅く御殿場に到着、特別支援教育部の岡本先生も、午前中は吉田町で講演をされていきました。不登校対応部会の和田先生は、先生方に参考になるようにと資料を練ってくださいました。和田先生は前日に、「明日が楽しみです。」と話をされていました。幼小中連携部会の発表校である富

士岡小学校は、忙しい中、研究の実践を分かりやすくまとめていただき、御苦労をおかけいたしました。

講師の先生方の教育への情熱は、わたしたちに大変刺激となるものであり、自分ができることを精一杯やろうと思いう元気をいただきました。

「原田先生の教育観、人生観に感動しました。先生の困難に立ち向かう姿の基には父性母性、子ども性が必ずあり、最後まで子どもたちを守り抜く姿勢は素晴らしいと思えました。すぐにでも生かせる、生かしてみたい実践やヒントをたくさんいただきました。」と先生方の感想にありました。原田先生には、「心づくりの大切さを教えていただきました。時を守り、礼を正し、



場を清める精神を基本とし、自分で考える力、自己肯定感を伸ばし、自己開発に導くこと。これは教師の使命でもあるように思いました。「いい感じ」と生徒に思われる原田先生の魅力に十分納得しました。

午後の分科会では、研修を深めるために、研修方法を工夫しました。先生方には、積極的に分科会に参加していただいたおかげで、研修会をより充実したものとすることができました。また、これから研修で得たものを、学校内で生かしていただけたらと思います。

早速、不登校対応部会での研修を夏休み後半の校内研修で生かしてくださいました学校もあります。また、分科会で活用した資料を学校・園で共有していただきたいと思えます。冊子表紙、裏表紙のカットの作者である紙切り作家 水口千令先生は、D分科会の講師の橋本先生と交流があり、復興支援として、石巻市の学校に何度も足を運び、子どもたちに元気を与えておられることを伺いました。フォーラム当日にも、D分科会に参加していただき、橋本先生の

話に耳を傾けていらつしやいました。

このように、多くの方々の思いが寄せられた研修会を開催することができたことに、感謝の気持ちが続えませんでした。

また、今後の教育フォーラムに、多くのご意見をいただき、ありがとうございます。改善を要する点については、要望等を検討し、より充実した研修となるよう見直しを図りたいと考えています。

【福島英子】

### 各分科会の様子

#### A分科会 (特別支援教育部会)

第一回特別支援教育部会では、静岡大学教職大学院(特別支援教育領域) 特任教授の岡本康哉先生を迎えて、『インクルーシブな社会を目指して』という演題で講義をしていただきました。

「発達障害の捉え方」については、医学的に発達障害と診断される子どもの数が増加している一方で、親子関係の変化による子どもの不安定な精

神状態も集団生活での様々な不適応を起している子どもも増えているとのことでした。園や学校としては、子どもや保護者を巻き込んだ「個別の支援計画・指導計画」を作成し、共通の目標を設定し、みんなで目標達成に向かっていくことが大切です。

「保護者支援の在り方」については、ヒットする言葉として①肯定的な言い方を意識する②共感的な聴き方をする③未来を語る④例外を大切にすること⑤生徒指導の場面では事情をしっかりと聴く⑥励ましの場面での在り方⑦学習場面の在り方などの話がありました。「面談とカウンセリング」では、①自己一致②共感的理解③無条件の肯定の三原則を活用していくことを学びました。

「岡本流ユニバーサルデザイン」について、特にユニバーサルデザインの授業とは、「構造的に学習内容を分析した授業」であるという話をされました。分かるということ、①「構造」が見えてくること、②「仕組み」が見えてくること、③「理屈」が見えてくること。これにより「すつきりとした教え方」になる

ということ学びました。  
また「誰にでも分かりやすい授業」とは、①見たため：視覚的な情報を多く与えよう。  
②確かめ：スモールステップで確実に見届けよう。③あらかじめ：先の見通しを持たせた指導をしよう。

この三つの「め」を授業で意識することが効果的であることも教えていただきました。  
岡本先生の講義は、今後の教育実践に向けて、大変参考になる具体的なお話ばかりでした。

後半は、幼小中の校種ごとに分かれてのグループ討議で支援の実際についての情報交換を行いました。

参加された先生方からの感想をいくつか紹介します。

「岡本先生の講義は、具体的な内容もあり、参考になりました。」「保護者支援の在り方はとても勉強になりました。」

「校種別のグループ討議だったので、共通した話合いができてよかったです。」等のご意見をいただきました。今後、先生方が、本分科会で学んだことを生かして、教育活動に取り組みむことを願っています。

【長澤広志】



**B分科会**（不登校対応部会）

＝第1回不登校研修会では、御殿場市スクールソーシャルワーカーの和田昌子先生を迎え、講義『不登校支援 ～自尊心・自己肯定感を育む支援～』と演習「相互作用を意識したプランニング」の二本立てで研修を行いました。

教育指導センター指導員、スクールカウンセラー、学校教育相談員、特別支援教育巡回指導員などの立場の方々に加え、子育て支援課、社会教育課、家庭児童相談員、子ども家庭センターなどの関係各機関の方々にも多数御参加いただき、喫緊の課題である「不登校の低減」について様々な角度からのアプローチ方法を探りました。また、アセスメント・プランニングシートは、総合教育センターが作成した不登校に特化した支援シート（APシート）を使用しまし

た。講師の和田先生は、工夫されたパワーポイントと先生方を包み込む語り口で、熱いメッセージと生徒指導スキルの両方を伝えてくださいました。

参加者からは、Very GoodではなくGood Enough、よいという言葉が大変印象的でした。子どもの苦しみに気付くこと、理解するだけではなく理解者だと分かってもらうことが大切など、多くのことを学びました。や「行政の支援を取り入れていくケースで演習をしていただき、大変参考になりました。学校だけでは解決しにくいケースが今後増えていくと予想されるので、この演習の内容を参考にしていきたいです。」などの感想が寄せられました。参加者が自校に戻り、この研修で学んだことを生かして、教育活動に取り組みんでくれることを願っています。

二月に実施される第二回の不登校研修会は、本年度、市の条例により設置された「いじめの防止等対策推進委員会」委員の常葉大学太田正義先生を講師に迎える予定です。

【石田善正】



**C分科会**（幼小中連携部会）

では、全体会とグループ協議の二本柱で研修を行いました。

前半の全体会では、今年度本発表を控えている富士岡中学校区の幼小中連携・一貫教育の研究について、富士岡小の齋藤翔先生が、発表してくださいました。研究主題を『豊かな心を育み自己実現を図ろうとする富士岡っ子』と設定し、まずは、富士岡幼稚園、富士岡小、神山小、富士岡中で目指す子ども像を共有しました。一園二校の研究となるため、目指す子ども像を明確にすることは重要であり、それを富士岡中学校区の幼小中連携・一貫教育のグラウンドデザインとしてまとめたことは、大変価値ある取組であると感じました。

また、「シラバス（学年で身に付けたい力）」の作成や「聞く・話すのステップ」を活用

した系統的な指導等、先生方が、子どもたちの幼小中、十二年間の成長を見通し、つながりを意識しながら、子どもたちを支えていく姿勢も大変参考になりました。子どもたちや先生方の交流で終わらず、教育課程にまで一歩踏み込んだ研究であるため、今後、他の中学校区にも広がっていくことを期待します。

後半のグループ協議は、様々な中学校区の先生方で構成したグループで、「各中学校区における幼保小中連携・一貫教育の取組から、自校の取組を見直す」というテーマで話し合いを行いました。先生方は、他校区の取組について、自校の取組と比較しながら話を聞いたり、詳細について、質問をしたりするなど、熱心に協議に参加し、自校の取組の参考にしていました。

参加された先生方の感想を紹介します。「小学校での家族ふれあいデー、ノーマEDIAデーなどの取組を聞き、幼稚園でも取り組めそうだと感じました。」「それぞれの中学校区での取組の情報交換が参考になった。自分の校区でも無理のないところから生かしてい

たい。「学区」ごと、実態も違えば、実践も違った。すぐに生かせるものもあり、参考になった。日頃から幼保小中が情報交換を密にすべきだと感じた。」等、幼小中連携・一貫教育の重要性を改めて確認できました。

【小越隆則】



D分科会 (学校安全部会)

では、分科会テーマ「日頃から取り組む学校の危機管理と安全教育」について研修を深めるため、講話と全体会を実施しました。

講話では、石巻市立稲井小学校長 橋本恵司先生が講師を務めてくださり、『東日本大震災の被災地 北上から未来へつなぐ』を演題として話をしてくださいました。

先生ご自身も被災をされた中、子どもたちや学校が、日常を取り戻すためにご尽力された話からは、相当なご苦労があったと実感しました。

被災した三校が合同で送る学校生活の問題、子どもたちを元気にするための支援の在り方、教員間の意思の疎通の図り方、地域との関わり、地域における学校の役割等、多くの課題がありました。それを解決する原動力は、子どもたちの心を元気に、自分、そして人、地域を大事にする気持ちで育てようとする熱い思いでした。

また、子どもたちには今ままで支えられる立場であったところから、自分が支え手となることを考えさせていく、発信していく教育への取り組みに、人間教育の原点を教えていただいた気がします。

自分の学校を愛する純粋な子どもたちの心に触れ、また、校歌に思いを込めて歌う子どもたちの歌声を耳にしました。改めて、子どもたちが安心してのびのびと楽しく学ぶことができる学校をつくることへの重大な責任を感じました。

分科会後半は、橋本先生から少しでも多くの話を伺いたい、私たちの声を直接先生に伝えたい、全体で共有したいと考え、全体研修としました。先生方からは、「震災後の避

難訓練の取組について」「教職員の防災に対する意識づけの工夫」等、質問が寄せられました。また、実際経験しない、防災への意識が向かないといった課題も挙げられました。学校での取り組みとして、職員で被災地を訪れた体験、学校で「防災の日」を設定しているなど、参考となる話題もありました。

橋本校長先生は、今年の三月の学校便りでこう述べていらつしやいます。

「3・11大震災から四年経過考え続けること… 私は、あの震災を早く忘れたいなあと思いますが、もう一方で、自分の中にはしっかりと記憶して、忘れてはいけないこととして考え続けなくてはならないとも思います。考え続けることが、震災を風化させないことにつながると思っています。そのため、私は2つのものを残しています。一つは今着ている服です。私の家はすべて流され、その時仕事で着ていた服が一枚だけ残りました。震災後、この服だけで何日も何日も過ごしました。もう一つは、ごみ箱です。家がなくなつて仕事場に寝泊まりしていて、震

災から二十日間がたった頃、ようやく家族と住むことができ、家で用意した最初のもものが、このごみ箱でした。もう捨ててしまおうと思う時もありましたが、大震災のことを考え続けるきっかけにしようと思つて使いつけています。」

【福島英子】



清水町教育委員会より

教育フォーラムも三年目となり、他市町にも本研修会が幅広く周知されてきました。今後の参考にしたいという

要望から、今年度は、清水町教育委員会の方々に参加し、感想を寄せていただきました。「特別の教科 道徳」について、そのねらいや具体的な内容に触れた勝又将雄教育長に

よる基調講話は、二年前から道徳教育の研究に取り組んでいる当町にとって大変価値のあるものであり、今後の方向性を再確認するよい機会となりました。

また、原田先生による講演会では、再建の三原則や人間関係づくりの基本となる教師としての姿勢について、改めて学ぶことができました。ご自身の体験を踏まえた熱い語りにも多くの先生方が引き込まれていきました。

午後の分科会では、「幼小中連携部会」にて富士岡小学校の実践事例を拝聴しました。幼小中それぞれが、三つの研究部を立ち上げ、三つの視点から取組を図っていく研究体制は、子どもの成長をあらゆる角度から見取るという点において、非常に有効であると感じました。

最後になりますが、御殿場市教育フォーラムから得たものは非常に多く、今後の町の教育行政の参考とさせていただきます。勝又教育長様をはじめ、御殿場市教育委員会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。【指導主事 渡邊潤】